

だいじゅうななしょう 第十七章

けらい ふまん 家来の不満

いっぽう いわむろ い ぐち まえ にんじゃ おさ けらい ま
一方、岩室の入り口の前で、忍者の長は家来と待っていました。

けらい まわ せんせんきょうきょう みわた うち ひとり いや ぼしょ
家来たちは周りを戦々恐々と見渡していました。その内の一人は「ここは嫌な場所だ。この
ちか おに せ やま い げんいん しら
近くに鬼がいつも攻めてくるそうだね。山に行行ってその原因を調べればいいのに、どうして
やま い きんし い
山に行くことを禁止してるのかな」と言いました。

はなし き けらい ぜんいんしず にんじゃ ほう うかが ま
その話を聞くとすぐに、家来は全員静かになっておろおろと忍者の方を伺いました。間もな
けらい おさ おお こえ じょうだん い い さいしょ
く、家来の長は大きな声で「そいつはいつも冗談ばかり言っているんだよ」と言って最初の
けらい わき ひ こ みみう ばかもの にんじゃ だいまよう め みみ もの
家来を脇へ引き込めて、耳打ちしました。「馬鹿者！あの忍者は大名の目と耳のような者だ。
し
死にたいのか？」

さいしょ けらい かお あお もう わけ かしら にんじゃ かんが
最初の家来の顔が青くなりました。「申し訳ございません、頭。忍者のことを考えていませ
じつ かない かぞく ちか す さいきんたいへん せいかつ おこ まえ
んでした。実は、家内の家族がこの近くに住んでいて、最近大変な生活を送っています。前の
だいまよう じだい
大名の時代...」

だま きんく
「黙れ！それは禁句だぞ」

しゅんかん だいまよう いわや で ようじ お しろ もど い
その瞬間、大名が岩屋から出てきました。「ここでの用事は終わった。城へ戻ろう」と言
ました。

うま しろ もど あいだ にんじゃ おさ だいまよう となり すわ だいまよう おそ おお けらい
馬で城へ戻る間に、忍者の長は大名の隣に座りました。「大名さま、恐れ多くも、家来と
いっしょ い よ かんが ぞん
一緒にあそこに行くことは、あまり良い考えではなかったかと存じます。そんなことをした
けらい こわ だいまようさま たたか どきょう
ら、家来たちは怖がって、大名様のために戦うことには度胸をなくしてしまうんじゃないで
しょうか」と言いました。

しかた ごえい たび あんぜん だいまよう こた
「仕方ない。護衛のない旅は安全ではないからな」と大名は答えました。